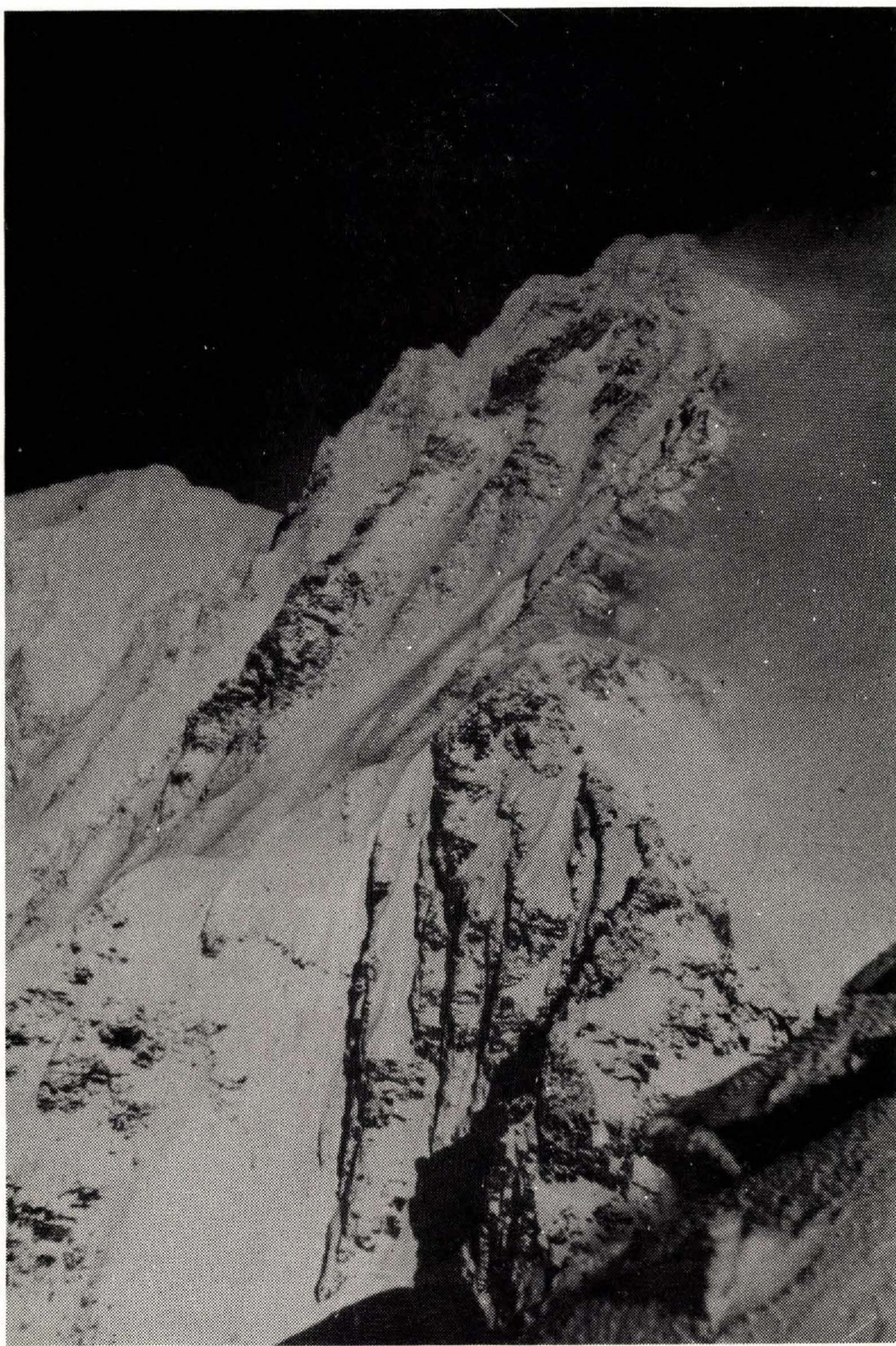


針葉樹會報

復刊第49号



1977.3

表紙の写真説明

船本君が小谷部全助の思い出を書いたので、何か小谷部の撮した写真でもないかと、編者から依頼があった。そこで手許に残っている数葉のなかから、彼の写した一枚をここにかかげる。昭和10年12月下旬、乗鞍の合宿を終って、小谷部、鷹野雄一の両君と三人で上高地へ入り、西穂高の間ノ沢から間ノ岳へ登った。その時ジャンダルムの飛騨尾根を撮した一葉である。当然烈々たる闘志をいだいていた21歳の小谷部が、どんな気持でシャッターをきったか、その闘魂がさまざまと伝わってくるような写真だ。カメラはたしかホクトレン德尔のブローニーサイズ、フィルムはコダックのパナトミックを使っていたように記憶する。この写真が写されてから40余年、小谷部、鷹野両君が逝ってからでも30年以上の歳月が過ぎてしまった。

(望月達夫)

目 次

昭和五十一年の山旅
還暦のラッセル
小谷部、森川両氏の年忌に憶う
美女峠と吉尾峠
チロールのエーデル・ワイス
中川孫一氏五年祭
孫さん追悼山行

久保孝一郎	増山清太郎	勝田有恒	望月達夫	船本文治	大塚武	近藤恒雄
：	：	：	：	：	：	：

16 15 11 8 4 2 1

昭和五十一年の山旅

近藤恒雄

と改まって書き出す程昨年は山へ行かなかつた。山が嫌いになつた理では決してない。その証拠に昨年裏の高麗山に朝登つた回数を調べて見たら二三四回で一昨年より五〇回多い。

標高一六二米突の低い山に登つた回数が山の好きな証拠としては、いささか面白ゆい感もするが登山回数が年三回とは情けない。

二月十四、十五日 三体明神山(三大明神山)
五月十五、十六日 山伏岳

十月二十九／十一月一日

奈良岳、奥三方山、高三郎山

(但し暴風雨のため途中から引返す)

是れ丈である。今年はも、少し多く登り度いと考へて居る。処で編集幹事から健康管理に就き何か書けとの御命令があつたので一筆紙面を汚させて貰う理だが小生の最近十五年

間位の登山の専らの相棒だった村尾のペんち

やん、深田の久弥さん、川喜田の旦那、藤島

のオールサンデー先生が久弥さんを除いて皆んな癌で逝つてしまつた。一番体质的に癌に

なり易い小生が未だに罹らず不相変アルコ一

ルに親んで居る。不思議と云えば誠に不思議な理でその原因がとんと分らない。小生は父

親から長兄、次兄、長姉、妹全部胃癌で死ん

で居るからである。ペんちゃん初めて山友達の

食生活の実体が良く分らないが小生の好みの

食べ物は魚肉と野菜である。特に魚は大好物

で大磯に引越したのも魚を食べ度い一念であ

つた。野菜も好きで「オデン」でも食膳に上

れば御機嫌は麗はしくなる方である。肉類は

若い頃から特に好きと云う程でなく勿論食卓

かかると日の出となる。是れは頗る気分が良

い。然し是れも何萬回登つて日本記録をつく

最近は手が出るが昔から餘り食べない。結局酸性の強い食べ物を餘り食べない方である。小生の親兄姉妹は皆菓子が好きで「ウイスキー」なんて誰も相手にせず菓子、菓子である。どうも是れが怪しい。

健康の事を書くつもりが何時の間にか癌の話になつてしまつたが最近の小生の生活の基本方針は何んでも極端に走らない事にして居る。生活全体を是れで貫く事にして居る。

特に食べ物は量を減らして居る理では決してないし日によつては結構食べて居るが「超満腹」という食べ方は決してしない。飲みものに就いても同じである。体重も68—70キロ位を上下して居る。然し朝の散歩は極端と云えば極端かも知れないが大磯に引越して十一年間雨天とか一般登山、病氣以外は必ず朝六時頃から一時間位裏の高麗山に登る事にして居る。勿論冬は懷中電灯持参で家を出て途中で空が明るくなつてくる。頂上から縦走して下山にかかると日の出となる。是れは頗る気分が良い。然し是れも何萬回登つて日本記録をつくって健康の自慢に仕様と謂う野心は更々ない。

登り度くて登つて居る丈で決して健康の為と思つて登る努力をして居る理では無いので健康談義に此散歩を入れるのは少々お怪しい理である。夜があけない暗い内に家を飛出するので老妻もあきれて今は何も云わない。却つて明るくなつても寝て居ると何処か体の工合が悪いのではないかと思う様になつた。

そんな理で普段は朝六時出発、七時帰宅、八時半に東京へ出発、大磯駅迄歩いて事務所に出頭、夕方は出来る丈早く東京駅から湘南

電車で帰宅、六時半頃には早や自宅でビールやウイスキーを飲んで居る。そして九時過ぎにはさつさと寝床に潜り込んでしまう。是れが僕の一日の生活であつて何處に健康の秘訣があるのかさっぱり分らない。

七拾歳も何時の間にか過ぎて早や此七月には満七拾五歳となる筈である。「少年老い易く学成り難し、一寸の光陰軽んず可からず」と謂う朱熹の訓戒も既に顧みる暇も無く老いてしまつたとは僕は思はないが世間では早や

奴が居る。俺は必ず白寿迄生きて見せると大言壯語する人間も居る。然しここまできたら天の命に素直に従うのが一番呑氣で良いと思う。健康はただ単に長命の為めの健康でなく学校のクラス会に出席すると老いて益々の費鏢組が多い。聞いて居ると恐ろしい事を云う

完全に老人扱いである。会社に行つて若い人の間に出てるといささか老い過ぎて面映ゆいが学校のクラス会に出席すると老いて益々の費鏢組が多い。聞いて居ると恐ろしい事を云う奴が居る。俺は必ず白寿迄生きて見せると大言壯語する人間も居る。然しここまできたら天の命に素直に従うのが一番呑氣で良いと思う。健康はただ単に長命の為めの健康でなく学校のクラス会に出席すると老いて益々の費鏢組が多い。聞いて居ると恐ろしい事を云う奴が居る。俺は必ず白寿迄生きて見せると大言壯語する人間も居る。然しここまできたら天の命に素直に従うのが一番呑氣で良いと思う。健康はただ単に長命の為めの健康でなく学校のクラス会に出席すると老いて益々の費鏢組が多い。聞いて居ると恐ろしい事を云う

還暦のラツセル

大塚

武

この頃は、山登りといつても、年に三回か四回くらいしか行つていないので、あまり種がありませんが、暫らく会報に御無沙汰していましたので近況報告のつもりで書かせていただきます。

昨年は春から夏の頃、恵庭岳（一、三一九メートル）と、日高の幌尻岳（二、〇五二メートル）に行つて

来ました。日高の山は一般にアプローチが長く、私には“見るだけの山”かと思つていましが、日本山岳会の計画で二泊三日の山行の案内があつたので参加しました。昔野呂川から大仙丈沢をつめて仙丈岳に登つたり、大

ただ沢に丸太の橋くらいかかつていて、その点少し手間がかかります。水量の多い時は大変でしょう。人数が多くたので、熊が出ても遠くの方なら写真にでも撮つてやろうと思いましたが、幸か不幸か一匹も見ませんでした。この山行で若干気をよくしたのは、下りに足が痛まなかつたことです。私はここ数年どうも下りになると膝のあたりに痛みをおぼえていたのが、この時は少しも痛まず快適でした。

さて今年になつて、これも日本山岳会の山行で、チセヌブリ（一、一三四米）へ行つて來ました。この山の麓にチセハウスというスキーヒュッテがあつて、ここは主人は織笠さんという人で、スキーの名人ですが、その奥さんが昔日日本銀行の本店に勤めていたということで、私も前歴のようなもので親しみがあるわけです。いつも手土産を二つ持つて、一つは御主人用にアルコール類、一つは奥さん用に菓子類という次第です。いつか北電の小野君とニセコアンヌブリから、ニトヌブリ、チセヌブリを越えて行つたとき、屢々の転倒で菓子がくずれて閉口でした。今度は下からバスで行つたので、その点は安心でした。織笠さんと歓談中“ひょつとしたら大塚さんに女房をとられていたかもしれない”というので、“そうかもしれないが、私はその頃生憎兵隊にとられて、そのひまがなかつた”と云つて大笑いになりました。

チセヌブリはたいした山ではなく、下の方はリフトがあつて二時間ばかりで頂上に着けます。この山は今まで三度来て、三度とも

天気が悪く、向いに羊蹄山（一、八四三米）が見える筈ですが、見たことがありません。

今度も頂上には立ちましたが、どこも見えず、ただ白い頂に立つただけでした。なお

この山の登りに、一人御年輩の方が加えて欲しいということで同行しました。雪が深かつたので、交替にラッセルし、この方も自分の番になるとチャンとラッセルして、頂上に立ちました。私も今年還暦ということになりますが、まだラッセルが出来て、自分の責任分は果したことに秘かに喜びを感じていました。

チセハウスに帰つて、この方といろいろ話をしているうちに、北部軍副総官をして退官されたが、年は七十二歳になるというので、六十歳のラッセルくらいではいばれないと思いました。チセヌブリの更に南に、石楠花岳（一、〇四八米）という山があります。織笠さんの話で、以前この山に東京の“老いらく山岳会”的な人を案内したところ、涙を流して喜ばれた

ということですが、涙を流す程でないまでも、ともかく老化しないように山に登りたいものです。

さて、私も今年は還暦となると、何か記念

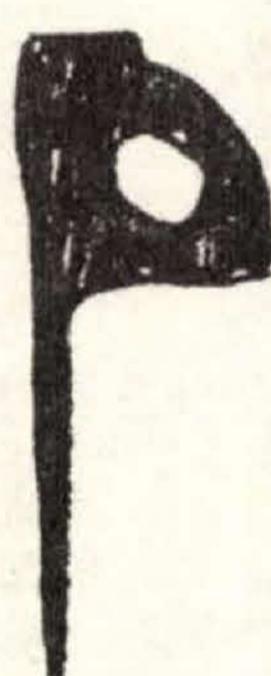
塔になるようなことをしたい。それには一つはイスのマッター・ホルンはどうだろうか。

昨年でしたか、早稲田の今井友之助さん（穗

高の滝谷の冬期初登攀者）が登つておられる文章を読んだことがあります。今井さんは私より確か五年くらい先輩にあたるので、これから精進したら登れないこともあるまいと思います。

もう一つは、マッター・ホルンはともかく山麓まで行つたことがあるので、それよりヒマラヤのトレッキングはどうだろうか。行くなら天候の安定する秋がよいのではないか、エヴァレスト周辺にするか、ポカラの近くアンナブルナ周辺がよいか、そんなことを考えて目下ヒマラヤトレッキングの本を四冊ばかりそろえて、文章を読んだり、写真や地図を眺めたりしています。

どなたか、同行の士がいたら御一報下さい。



小谷部、森川両氏の年忌に憶う

船 本 文 治

助さんと森川氏が富士見高原に手を携えて他界したのは、終戦の年十二月十三日だから、今年はちょうど両氏の三十三回忌の年忌に当たる。

両氏の追憶はいろいろあって、どれも私は忘れるに忘れられない想い出である。いつしょに登った山行やザイルを結んだ激しい登攀も忘れられないし、新宿や大阪の盛り場に遊んだこともまざまざと眼に焼きついて懐かしい。

が、それよりも私には、死を予感させる助さんからの絶望的な便りを貰いながら、何事もなし得ず、かえって森川氏までも死に至らしめた口惜しさが、いまさらのように当時を想い起こして胸を衝く。

山岳部時代の仲間が次つぎと応召し、あるいは疎開や空襲でちりぢりなったときに、助

さん、森川氏、私と三人で最後まで連絡をとつて励ましあい、戦時下の耐乏生活のなかで同じ病気と苦闘していただけに、私だけが残されたような気がして、なにかにつけて当時のことが想い出されるのである。

最近のアルプスの知識もなく、永い間山から遠ざかっていた私は、一昨年の秋、たまたま社用で白馬に出かけ、八方尾根を散策するつもりが唐松頂上までぐいぐいと若者に劣らない調子で登ってしまった。その思いがけない自信がきつかけとなつて、昨年は意欲的にいろいろと日程とコースに迷つたあげく、

九月二十三日からの連休を利用して、夜叉神峠から広河原、白根三山、奈良田コースと決め家内を連れて吹雪の立山に登つた。剣ヶ御前から白く鎧つた剣の尾根、谷をにらみながら、楽しかった昭和十二年夏の合宿を回想し、両氏の冥福を祈ることができた。

用心し過ぎて荷物の多かつたせいもあるが、大樺沢の登りで体力の衰えをいやというほど思ひ知らされ、荷物はすっかり娘に担いで貰う始末だつた。

今年は年忌の供養のために、ぜひとも何処か、両氏と最もかかわりの深い山へ、静かに

登つて靈を慰めたい。北岳か、鹿島槍か、穂高か、それとも蒲田に入つて笠から穂高を見つめてみようか。

大阪在住の会員に誘いをかけてみたが、反応がないので、常盤スキースクールで常盤先生にお世話になつてゐる愚娘が多少は山歩きもできるだらうと、娘と二人で出かけることに決めた。

北岳は、野呂川林道の補修工事と十七号台

風による崩壊で、林道も電発道路も車が広河原に入らない。奥又白には天幕がないし、西穂は小屋の奥原守が松本に降りてゐるといふし、娘の岩歩きも気がかりだ。

二時ごろやつと八本歯のコルに辿り着き、し

らない。

ばし黙祷、バットレスに漂う助さん、森川氏の靈の平安を祈ることができた。

昭和十六年のこと、助さんと、夏には北岳へ行こうと約束しながら、果たせなかつた。

いま私が来ると知つて、森川氏を誘つて二人で、きっと来てくれている。そう思つて、折から岩に動めくガスの中をじつと見つめながら、在りし日の両氏の若き情熱を追想し、長いこと坐りこんでいた。

それからガラガラ道を頂上に急いで、暗くなつてから、やつと稜線小屋に辿り着いた。

翌日も、間ノ岳、農鳥岳の登りでひどく荷物に難渋し、大門沢小屋に着いたときは、寥々たる夜の闇が狭い谷を押し包んでいた。

齡には勝てない、そんな苦労もあつたが、台風のせいでの小屋にも人が少なく、白根はどこもひつそり閑として、晚秋の弱い光と谷から吹き上げるガスの交錯のなかに息づいていた。

それが私には、両氏の菩提寺に行つて、静

かに裏の墓地を歩いてきたような気がしてな

富士見でほうれん草を育て、森川氏は茂原で実りの秋を楽しみながら、アルプスの峯々に

やるせない想いを馳せていたことであろう。

もし、あの時に私が健康を害さずにいたなら、両氏のためになにかできたらう。そして、そのうち、みんなが復員してきて、なんとかなつたろうに。

いつまでも、そんなことを想つて、悔んでいる私である。

(一九七六、一〇、一〇)

× × × ×

助さん、森川氏の突然の訃報による衝撃でふたたび有熱状態に逆戻りしていた私は、明けっぱなしの窓から射し込む光に春のきざしが感ぜられるころに、ようやく元気を取り戻した。

斎藤氏に、常盤先生を山の出湯と吾妻山にお誘いしようと提案すると、山へ行つたことがないので、いちど、ぜひ案内してほしいといふ。米沢駅に、先生のお元気な登山姿を見たときは、まったく嬉しかった。

戦争中のもうものこと、ページのことなど、話は尽きない。なによりも、助さん、森川氏の他界するまでの様子をお話してきて、心の安らぎを得た。

なだらかに連なる吾妻山は、高く澄み上がつた空を限つて、日ごとに秋の色を濃くし、

そうこうして、春も過ぎ、裏の田圃に心よ

い秋風が稻穂をなでるころになると、病氣の急速な快復が肌で感ぜられ、田圃に続く吾妻山やあたりを取り巻く藏王、朝日、飯豊の山嶺は、私の心をいやがうえにも搔きたてた。

こうなると、助さんがやつたように、私も山へ登つて、積極的に自分の健康を試してみたくなる。

それに秋の米沢は、果物も豊富だし、米も野菜も、顔を使えば、わりとらくに手に入る。

斎藤氏に、常盤先生を山の出湯と吾妻山にお誘いしようと提案すると、山へ行つたことがないので、いちど、ぜひ案内してほしいといふ。

米沢駅に、先生のお元気な登山姿を見たときは、まったく嬉しかった。

戦争中のもうものこと、ページのことなど、話は尽きない。なによりも、助さん、森川氏の他界するまでの様子をお話してきて、心の安らぎを得た。

なだらかに連なる吾妻山は、高く澄み上がりをいたいたいた。

両氏の他界した年のいま時分は、助さんは

原君の戦死を知り、常盤先生の消息も判つて、先生からは原君や岩崎君の米谷ゼミ一年

先輩の齊藤氏が米沢で検事をしている旨の便りをいたいたいた。

五色、姥湯、太平、高湯など、私を育てた出で湯を抱いて、田圃を距てて横わっている。栄養一つ摂れない、じり貧の大坂に、早く見切りをつけて生き残り得たことの幸せを見みじみと噛みしめた。

三人行く山路の秋は急がれて

敗戦の去年を語りぬるかな 敏太

× × × ×

たしか、滑川から姥湯への登りであつたよう記憶する。先生から、此の一首を詠まれて、私は思わず、はつと立ちすくんだ。さきほどから、助さん、森川氏それに原君のことを憶い、下を向いて久しく、深い感慨に沈んでいたのである。

私は気を取り戻して、あわてて斎藤氏の跡を追つた。

山は一面に明るい秋の陽をうけて、紅葉に急いでいた。その時の光景だけは、いまでもはつきりと目に浮かぶ。

終戦早々にページで大学を去られた先生には、山岳部長時代のことが、なにもまして懐かしく想い出されるのだろう。

いまだ先生のお宅に伺うと、例によつて

先生の話は百八十度飛び火するが、じつと聞いているうちに、必ず助さん、森川氏の追憶が語られる。

すると、いつも私は目がしらが熱くなり、先生の声が聞えなくなるのである。

(一九七六、一〇、一〇)

凍傷の影響も多少はあつたのか、卒業後思ふに落し穴に、次つぎと療養を強いらされた私は、山岳部時代の仲間がほとんど出征して行つたあとも、助さん、森川氏とは、最後まで連絡をとり、互いに励まし合つて闘病生活を続けていた。

そのころに両氏から貰つた数多い書翰は、保存してきたのだが、封筒も便箋も、茶色にしみが着き、虫が喰い、埃がこびりつき、裂けているものもあるうえ、両氏のことは会報に掲載された望月さんの隨筆もあることだし、

日付富士見高原発信の「真三郎は小谷部さんに会いに行くといつて出発し、途中雨に打たれて風邪をひき、十二月十三日、小谷部さんといつしょに死亡したので、遺骸を引取りに富士見へ来ました」と、涙でしたためられた手紙は、おそらくこれも整理してしまったのではないかと危惧しながら探してみたが、やはり残つていなかつた。

棚を片付けたさいに、おおかた廃棄してしま

つた。

すると、間もなく昭和四十六年十二月の会報に、柿原さんが、房州茂原の寺院からの書

翰、「実は森川君には、昨年十一月甲州の山に居りし友人の招きにより出発し、翌日遂に死亡致し、其友人も二時間後、共に黄泉の客となりました。十一月十二日でした。」を資料として公表され、「前掲資料によると両君の死去は昭和二十年十一月十二日、望月隨筆によれば同年十二月十三日となる。」と両者の喰い違いを指摘された。

そのとき、すぐ私は忘れもしない森川氏の御母堂様から頂戴した昭和二十年十二月二十日付富士見高原発信の「真三郎は小谷部さんに会いに行くといつて出発し、途中雨に打たれて風邪をひき、十二月十三日、小谷部さんといつしょに死亡したので、遺骸を引取りに富士見へ来ました」と、涙でしたためられた手紙は、おそらくこれも整理してしまったのではないかと危惧しながら探してみたが、やはり残つていなかつた。

幸いなことに、私が昭和二十五年、ただみ

ずから心をいやるために、両氏の想い出を書きとめておいたメモを調べてみたところ、望月さん隨筆が正しかったので、ほつとしてそのことはそのままにした。

ところが、先ごろ、まだ残っている書翰を読み返しているうちに、昭和二十四年十二月日本山岳会発行の「山岳」に望月さんが筆にされた追憶文の末尾の「小谷部全助君年譜」に「昭和十六年八月末の笠ヶ岳」が脱落しているのに気づいた。

助さんにとっては、そんなことはどうでも

よい、登山というより療養を兼ねたような山行であったのだから。

それよりも、両氏から貰つた書翰が、われわれの仲間のほとんどが出征中のものであるだけに、そのまま私して、藏つていてはいけなかつたのではないか。と、いって、私的なことがらをそのまま発表するわけに行かないから、謄写して両氏を知る御関係の方にだけでも、お送りすべきでなかつたか。そんな反省が、いまごろになつて私の胸に湧いてきた。たしかに、いま残つてゐる分を読み返して

みても、どれもが激しい山の友情がこもつていて、とりわけ助さんの絶筆となつた書翰など読むと、私には岩場でどうにもならない極限の状態で苦闘しているよう緊迫した気持に追いやられる。

素のまま公表するのは差障りもあるが、だからといって、謄写するのも億劫だし、また部分的に抽出しながら隨筆風に纏めるほどの私には筆の力もなし、あるいは差障りある箇所だけ部分的に省略すると、助さん、森川氏らしい人柄が出て来ない。

そういうわけで、どうせ会員は同じ釜の飯を食う身内みたいなものだから……そう思つて、両氏からいえば、余計なことをするなと、墓下から叱られるかもしれないが、素のまま会報に掲載方をお願いすることにした。

(続く)

一、新年会開催の件
このところ恒例となつてゐる在京会員による新年会を、一月十二日、如水会館に於て、開催しました。
出席者 吉沢一郎、松本謙三、近藤恒雄、久保田万治、手塚晴雄、増山清太郎、鈴木英雄、柿原謙一、望月達夫、佐々木誠、榎本直司、岩崎利一、日江井正己、宮城賢三、佐野茂雄、久保孝一郎、原田豊、小林茂雄、間々田良雄、樋口洪、望月敏治、小泉三好、奥野巖根、甘利仁郎、渡辺嘉佑、中島寛、有賀盈、小林進二、大建二郎、高橋信成、中村雅明、加藤正己、西牟田伸一、金子晴彦、前神直樹、藤本敏行、加藤博行、
(学生) 松田、佐藤活

久し振りに会の集まりに参加した人や、若手O.B.、学生等が最近の山登りを紹介した後、日本山岳会より借りた「ナンダ・デヴィ」の記録映画を上映、楽しいひとときを過した。

二、訃報 河相薰氏(昭六)

二月二十一日、早朝、急逝されました。針葉樹会として花をお供えいたしました。

美女峠と吉尾峠

——望月達夫——

山旅は日数をかけたほうが、心に残るものが多い。しかし、わずか二、三日の旅でも、そのときの自然のただすまいや、旅人の心のありようによつては、忘がたい印象をあたえてくれる場合も少なくない。わたしが会津の旧い峠から得たものも、まさにそれであつた。

美女峠という、その名をきいただけで杖をひいてみたくなるような小さな峠は、大沼郡三島町間方まかたと昭和村野尻とを結ぶものだが、五万分の一「宮下」図幅でその名を見出したのは、もう古いことになる。数年前に、その近くの志津倉山（一、二三四米）へ登つたある晩春の一日は、径のない山腹を南側へ下つてしまつたため、美女峠を越えることなく終つた。そして機会を待つていたら、丁度昨中秋の一夜、南会津山の会の集りが宮下の旅宿

で催されることになつたので、この峠を訪れてみることにした。

十月十六日、上野発午前七時三十八分の特急とき2号で、小出から直ぐ接続する只見線

の急行に乗ると、会津川口へは午過ぎに着くことができる。只見周辺の紅葉は丁度見頃で、人の出もかなり多いが、雲の多い天候は聯かるもの足りなく感じられる。

昔から語り伝えられた伝説によると、平家の落人、目差左衛門尉知親は娘の高姫を伴ない野尻村の山奥にこもつたと云う。高姫は同じ平家の中野丹下といふ若侍と深い仲になり、丹下が旅に出たとき、この峠の清水で口をすぎ、神に祈つて待ちつづけた。それで今まで確かめて歩き出したのは十二時四十分ごろであつた。刈入れを終つた田圃のへりを、徐々に登つて来し方を振り返ると、いかにも奥会津の秋だと思わせる山村風景が、心にしみじみとした情趣をわきたたせる。右手の沢から路がしだいに登りとなるころは、空のところ

どころに青空がのぞき、陽光も洩れてきたの

で、周囲をとりまく雑木の紅葉の色がひときわ冴えてきた。ブナ、ナラ、カンバの黄褐色の間にミネカエデやヌルデの真紅が目をうばうばかりだ。営林署の立看板を過ぎて間もなく、路の左側の高床の保修小屋に達する。志津倉山の頂きにも、まだ雲がかかつっていたが、そこから手入れのしていな草にかくれた路を行くと、綺麗な清水が湧いていた。これが「高姫清水」と言うものだろうか。

・下』参照)

この峠は俎倉山の山腹を捲いて行くので、所謂峠の頂きというような地形の区切りがはつきりしない。そこで、わたしは清水の近くに腰をおろして峠の頂きとした。野尻を歩きだしてから一時間と十五分ぐらいである。途中から見えた遠くの青い山々は、たぶん御神樂岳あたりであろう。

間方へくだる旧い道跡は、かなり幅が広いが、藪が生い茂り、丈高い芒が蔽いかぶさつて、両手で押し分けて行かねばならなかつた。その苦労も広葉樹林の目覚めるような錦に慰められ、足をとめることが屢々だつた。野尻川筋が視界から去り、往く手に高森山らしいのが現われてくると、しだいに下りがはつきりして、旧い牧柵の入口のような処を通過した。そして間もなく新しい好い道にとび出した。左手には錦の林に囲まれた緑美しい草原が展け、その日溜りで、またゆっくり休息した。村の放牧場であろう。

幅広い車道をくだつくると、やがて田圃が現われ、稻架にかけられた稻穂が西陽をあ

びて美しかつた。入間方からの車道が合すると、道も一段とよくなつて、峠から一時間半ほどで、まだ茅葺屋根の多い間方の邑に着いた。丁度四時に町営のワンマンバスが出ると、いうので、無駄な時間を費すこともなく、小さなバスにゆられて宮下の宿に着いたのは、まだ日没前であつた。

あくる十月十七日は、前日にまさる秋晴れを迎えた。博士山へ行く連中と別れ、われわれ四人はE君の車で、また川口から野尻川を遡り、中向で車をおり歩き出しが八時五十分であつた。

早朝は朝靄が漂つていたが、中向に着くころは美しい秋晴れとなつて、坂下沢沿いの紅葉は真盛りだつたから、青空に映えたその美しさは、言ひようもなかつた。三ッ目の木橋の手前から、そこまでの車道に分れて右へ入る小路が、吉尾峠へ向うものである。この細路は沢をあちこち渡つて登つてゆくが、迷い易いところもない。青空に盛りの紅葉、その美しさにわれわれは酔つた。沢を離れると、

北側に吉尾大山神社の木の鳥居と本殿が祀られ、路傍にツルリンドウの朱い実のなつてゐる吉尾峠は、實にいい峠だつた。途々Kさんが採つてきたアケビやエビヅルの実を食べながら、三十分ばかり休んで西へ下る。

ものの五分ばかりも行くと、現行の五万分の一地形図からは消えてしまつた吉尾の邑の茅葺屋根が、銀色に輝く芒の穂波の上にのぞかれた。倒壊してしまつた家、人の住まなくなつた廃家のなかに、白い干しものが目につく唯一軒の家があつた。声をかけると、丈夫そうな年輩の婦人が現われて、休んでゆきなさいといふ。表札には「小林桂」とあり、冬の間は布沢に下つてゐるが、雪のない時だけ、またここに来て家を守つてゐる唯一の家族である。

出された渋茶とシメジの梅漬けに、あたたかい人の心を覚え、百五十年はゆうに経つているといふ、古い見事な民家の内部を瞥見させて貰つた。こうした民家が、永く残されることは切に祈らずにはおられない。

この附近には打ち捨てられた田圃のあとも見られ、湿地にはヨシが多い。吉尾は「よしゅう」と発音するときいたが、栗尾が栗生から變つたように葭生よしから転化したものかも知れない。

下つてゆく路傍にはトリカブトの紫の花、美しい赤い実をたくさんつけたツリバナの灌木、サファイアのような青い実をつけたウリノキ（或はアオツヅラフジかも）がわれわれの足を止め、またKさんが、越後で「冬の花ワラビ」と言つてゐる綺麗なシダをみつけて、その名を教えていただく。しかし、くだるほどに布沢沿いの細路は、何回も沢を渡りかえし、昔は丸木橋ぐらいはあつたのだろうが、今は石の上を跳んでゆくか、流れの浅い所に足を入れて涉るしかない、峠道としては荒れはてた路であった。

途中で偶々登つてくる桂老人にゆき会う。丈夫そなうだが、もう七十歳は超えていよう。かなりの荷を背負つて一人登つてゆく姿を振り返り、達者なものだと感心する。こんな路を一時間以上も、あたりの紅葉に時々目を奪わ

れながらくだつて、ようやく車道に出た。来し方には、すっかり草にうもれた吉尾峠の古道があつた。小林さん夫婦が住まなくなれば、ら変つたように葭生から転化したものかも知れない。

古川古松軒の『東遊雑記』によると、この峠道は当時巡見使の通行した道であつたから、軽視し得ぬ路線であつた筈である。また『新編会津風土記』には「端村吉尾に行くに此川を渡ること凡そ數十回故に俗四八瀬越と云』とも記されているように、昔から川渉り多く、道もけわしかつたので聞えていたようだ。

車道は間もなく工事中の堰堤にぶつかり、数年ならずして、この附近に近代的なダムが造成されることが明らかである。芒などの多い路傍の草むらに、ホーネズキの実が朱い。

それをリュックにさして歩いてゆく友の心は、いかにも愉しそうだ。四十分ばかりで夕沢の民家が見え、なお十分ほどくだつた田沢の一軒の農家で電話を借り、黒谷からタクシーをよぶ。夕沢にも田沢にも、またその先の布沢にも、驚くほど美しい茅葺の民家が多い。



最近は、かなり辺鄙な土地へ行つても、茅葺の家が急速に亡くなつてゐるので、私は珍らしく貴重なものを見た思いがした。
只見では時間も充分あつたので、皆川文弥さんの所によつたら、マルメロ酒やママタビ酒などの駆走になつた。猪苗代へ帰るE君とは只見の駅で東西に別れ、われわれ三人は観光客で満員の電車に乗り小出に向つた。

（一九七七年一月記）

チロールのエーデル・ワイス

勝田有恒

編集の藤本君とおみねさんのところで逢つた折に、近時原稿不足と聞いたもので、いさか旧聞に属する話だが、チロールに遊んだ日のことを記して、ヨーロッパのことなど想い出にふけつてみることにする。

小学校一年生の長男を連れて、女房がフランスフルトにやつてきたのは七月下旬のことだつた。そろそろ夏休みに入ろうという時期なので、私が通つている研究所の人々もまばらとなり、私達も何処かでウアラウブ（休暇）をとることを考えねばならないときであつた。ドイツでは五月から六月にかけては休日が多く、旅行社のウインドーには、「さて休日がやつてくる！」という広告が出ぱなしで、さらにも夏休みのためには、部厚いパンフレットがうず高く積み上げられている。北欧からアフリカまで、期間も様々、御予算は如何様に

でも、という訳で、当時私は、ドイツ留学の必要性が一番あるのは、各市町村の下水道の部局員と交通公社の人ではないかと思つていてくらいで、旅行業社のサービスは大したものであつた。カタログをめくりながら考へた。

ドイツに来て間もない家族のためには、

まずドイツ語圏がよいだろう。それにしても子供をどうするか。「そうだこれがいい」。私が開いた頁には、お子様方と御旅行を、幼稚園つき！と見出しがついている。「幼稚園に入れておけば、言葉も習えるし、僕等も少しほ自由になる時間もあるし……」こんなわ

ルのユニフォームを着たボーアさんが、案内してくれる。驚いたことに、各旅行社がそれぞれ自社の客車をもつていて、各社の車輛がつながっている。この列車はハムブルクあたりから出発しているらしく、車中にはすでに先客があり、われわれが入つてゆくと、寝台車のカーテンの陰から、につこり会釈してくれる。翌朝改めて挨拶したら、人のよさそくな若夫婦だつた。子供もすつかり馴れて、ガルミッシュ・パルテンキルヘンの駅では、子供はこの夫婦と写真をとつたくらいであった。

事をしているところで、小じんまりとした貿易商の一室という感じないのだが、電話で予約した者というと、手際よく様々のティケットを並べて実に親切に説明してくれる。余り愛想がよいので、「貴女はドイツ人としては美人ですね」とお世辞の一つもいい度くなつてくる。「八月一三日、二三時一〇分に中央線に来て下さい。荷物はそこから先運びますから、では良い御旅行を。アウフヴァイーダーシャウエン。」

ヨーロッパ人には東洋人の子供というのは馬鹿に可愛いくみえるらしく、お菓子をくれるまではよいのだが、時折小銭をくれるのには大いに困つたものである。この夫婦にもずいぶん可愛がつてもらつたが、なにしろ一言もまだドイツ語が判らないので、子供も随分面喰らつたようである。ガルミッシュ・パルテンキルヘンといえば、インスブルックの北で、ドイツ・オーストリアの国境に近く、ドイツの最高峰ツクシュピツェ（二九六四メートル）の麓である。その二つ先で降り、やたらと古いバスに乗つて、チロールのロイタッショに向つた。国境をバスで越え、ツクシュピツェの南側の谷を西に廻り込んでいった。着いたのは午後三時頃だつたか、ロイタッショのバイダッハ村に到着した。そこは東西に拡がるかなり広々とした谷で、農家と小綺麗なホテルが散在し、耕地と牧場のかなたに教会の尖塔がひとときは目立つ村で、ホテルの窓辺にはゼラニウムの緋色が美しかつた。

翌日から例の幼稚園がはじまつた。嫌がる子供に云つたものである。「ほら皆同じ人間

だよ。なんとか判るものだよ。」少々酷だったが、半月もすればドイツの小学校に入ることになつてるので、免に角馴れて片言でも覚えて貰わねばならない。それでも矢張り心配で二時間ほどしてから、そつと見に行つた。すると私達を見付けて、先生が駆け寄つてきた。「何をいつても、どうあやしても、お子さんが泣いて困ります。チョコレートを上げたのですが、それでも泣きます。」彼に見付かならないようにそつと覗くと、子供は手に白いチョコレートを握つて泣いている。彼は恐らく白いチョコレートを知らなかつたのか、ショコラーデという発音が判らなかつたのか、いずれにしてもすこぶる不気嫌であつた。しかし午後になるとどうやら馴れたらしい。余り嫌だつたら帰つて来いといつておいたが、

舞い戻つてはこなかつた。彼にとつて外国人との付き合いの初経験であつた。子供は馴れ始めれば早いもので、三月も経つと、電話口でドイツ人の子供と区別がつかなくなつたく夫人みたいなことをいつていた。

南北にかなり高い山脈が連なり、谷の日暮れは早い。北側の山なみはツクシュピツェに繋がつてゐる筈だが、それはここからは見えない。そぞろ歩きをしていると、魚影を映す小川がある。広々とした牧場が木柵で仕切つてある。牧草が針面にかかるとしばらく続く

一オーストリア人というのは、ドイツ人より柔軟な感じがするし、このチロールの片田舎では皆素朴で、健康美に溢れていた。幼稚園の先生ブリギッダも一八歳くらいか、アルプスの少女ハイジが大きくなつたような娘さんで、なるもので、ホテルというよりもロッジといった方が適當だろう。食事もドイツよりは一般的に淡白で、デザートが中々こつっていた。泊り客は殆んどドイツ人らしかつたから、食堂での会話にも不自由しない。日本人は珍しいとみえて、誰彼となく話しかけてくる。外国人といえば必ず夫婦連れと思つてゐたが、子供だけ連れた奥方がかなりいたのは意外だつた。

「主人は休みがとれなくて」などと日本の御夫人みたいなことをいつていた。

とすぐタンネの林になつてゐる。ヨーロッパには雑草がないとは、和辻哲郎の『風土』にある指摘だが、全くその通りである。日本でいえば馬頭観音に当る粗末なキリスト像がばつんと牧場の分れ道に立つてゐるし、電柱を発見してふと懐しくなつたりする。

落ちついてくると、谷間の西にあるどつしりとした山が気になつてきた。漸く五万分の一を手に入れて調べてみると、三六六一米の一

ホーエ・ミュンデという山でツクシュピツツエとは谷を狭んで斜めに向い合つてゐる。ホーテルの在るところは一一〇〇米だから、一寸した高差である。麓までも八キロくらいある。暫く山歩きから遠ざかつてゐるし、これは止めた方がよいかなど、一度はあきらめた。小さな湖の畔で鱒料理はなかなか旨い。虹鱒のムニエルで、料理の名はミューレリンといふ。思わず注文のとき、シェーネ・ミューレリン（美しき水車小屋の乙女）といつてしまつたが、ウェイタレスがつっこり笑つたのは、シユーベルトの歌曲の名を知つてのことだろうか。意外にヨーロッパではクラシック音楽の

人氣はない。とくに若い男女は、殆んど無智に等しいくらいである。湖にはホーエ・ミュンデの影が揺れている。なんとなく針の木に似た山容である。よしやつぱり行こう。ホテルの主人であるリスト氏にいろいろ尋ねてみた。彼は余り奨めない。距離が遠いという。ビブラム底の靴をみせたら少々軟化した。それでも「登れますかな?」という顔をしている。

翌朝パンとソーセージを袋に入れ、皮ヤツケを着て出掛けた。テレビの天氣予報は好天を保証していた。女房は少々不安氣だが、諦めたのか、「無理をしないでね」といつたきりである。殆どが牧場である。一面にキンポウゲのような花が満開のところもあるが、これは休閑地らしい。丈の高い牧草を刈り入れているところもある。チロールは貧しいのか余り機械力は見当らない。ホーエ・ミュンデは中々近付かなかつたが、漸く上りにかかる。殆どが針葉樹である。近づくにしたがつた。殆どが針葉樹である。近づくにしたがつて、白く雪のようにみえていた上の部分が岩であることがわかつた。樹林帯は以外に粗ら

で、ところどころに草付きがある。心なしか草も弱々しく柔かそうである。今地図を出してみると、ホテルを出たのが九時半で、上りにかかったのが一時一〇分と鉛筆で記してある。草付きで一休みしていると、小さな蝶が舞つてゐる。小型のヒョウモンチョウで、開いたところをみると、思った通り珍しい種類だつた。はつきりとは判らなかつたが、日本では北海道の大雪山系にしか棲息せず、天然記念物に指定されているアサヒヒョウモンと実によく似ている。ものの本によると氷河時代からの残留種で、北極圏をとりまく周極種の一つだそうな。

いよいよ登りがきつくなつてきた。草付きとガレ場が混つてゐる。殆んど人に逢わない。お花畠に寝ころぶと、ヘッセの描いたペーター・カメンチンドの心境が判るような気がする。蛇の羽音がひときわ高くなる。草が香る。「グリュツ・ゴット」急に挨拶されてぎくつとした。一見して逞しい山男である。そだ、チロールでの方言だなと気がついて、

こちらも同じように答える。彼は太い指先に小さな草花をつまんでいて、「この花を見なかつたですか。」と私にきくのである。それはまざれもなくエーデル・ワイスだつた。

「この花は特別に保護しているので、探つてはいけません。」と言葉を続ける。「まだ見たことはありません。私は日本から来たのだが、一度エーデル・ワイスが咲いているところを実際に見たいと思つてゐるのですが。」どうも答にならない答をしたようである。

「そうか、日本から來たかね。この花知つてるだかね。日本から來たのなら、少しくらいはとつてもいいだべさ。」私「それは有難い話だけど、一体何處に咲いているのか判らない。教えてくれませんか。」どうも話がおかしくなってきた。「ついておいで」と道をはずれて五十米程ガレ場を下ると、あつた、あつた、草丈五センチ程のエーデル・ワイスが、三つ程花をつけていた。私は遠慮して一輪だけ摘み、大事に手帳の間に挟み込んだ。実のところ三挙九挙という形でお礼をいい、またもの径に引き返した。かなり急な登りも思

いのほか樂にこなして、二五九四米の前峰の頭についたのは二時を過ぎていた。この前峰はかなり大きく、相当に厚い残雪があちこちにあつた。最早草も這松もなく、ガレ場の正面に聳えるツクシュピツツェは、形は余り良いとはいえないが、なかなか立派であった。

主峰を目差して鞍部まで下つて残雪で喉を潤していると、「未だ登るのですか。」と声を掛けられた。見ると屈強な若者である。さつ

き主峰への道に点のように見えた人に違ひない。「出来れば。」と答えると、時計をみながら、少々遅いといふ。聞けば主峰の直下に大分時間を喰つたとのこと。場所柄無理はすまいと考えて、彼と下ることにした。前峰のみで撮つてもらつた写真が今も残つてゐる。彼は足が速かつた。下りには自信があつたのだが、ともすると遅れがちになる。だんだん

エーデル・ワイスは殆んど潰れていなかつた。「これがあのエーデル・ワイスウ！」女房はいたく感激している。ドロミテ（北伊）あたりで売つてゐるのと較べるとかなり小型ではあるけれど、産毛のはえた細い葉、水氣のない白い花。改めて大事に厚い本に狭み直した。ふと学生時代の縦走の際、山日記で押し花を作つたことを思い出していた。このエーデル・ワイスは、今でも小さな額に入れて飾つてある。別のとき採つたエンチアン（りんどうの一種）の色はすっかり褪せてしまつたけれども、エーデル・ワイスはその名の通り今

て高くはないのだなどといつてみても、怪訝な顔をしている。彼と道連れになつたのは幸だつた。麓にパークしてあつた車で、暮なずむ牧場を縫つて、あつという間にホテルに帰ることが出来たからである。日本の切手と人形を贈つて謝意を表したが、序に、ホーエ・ミュンデに登つたことをホテルのマスターに証明して貰つた。マスターはそれでも信じ難いような顔をしていたみたいである。

夕食を済ませて、そつと手帳を開いてみた。エーデル・ワイスは殆んど潰れていなかつた。「これがあのエーデル・ワイスウ！」女房はいたく感激している。ドロミテ（北伊）あたりで売つてゐるのと較べるとかなり小型ではあるけれど、産毛のはえた細い葉、水氣のない白い花。改めて大事に厚い本に狭み直した。ふと学生時代の縦走の際、山日記で押し花を作つたことを思い出していた。このエーデル・ワイスは、今でも小さな額に入れて飾つてある。別のとき採つたエンチアン（りんどうの一種）の色はすっかり褪せてしまつたけれども、エーデル・ワイスはその名の通り今

も元のまま白い。そのせいか、これを見ると直ちにホーエ・ミュンデの山容とともに、あの声をかけてくれた人なつっこい監視員の顔が浮び出てくる。「日本からわざわざこんなところまで来たのなら、二、三本採つてゆきなさい。」そうだ遠慮せずに、もう一、二本貰えばよかつた、などと思つてみたりもする。そして、このエーデル・ワイスを見るにつけて、今一つ私の脳裡に鮮明に蘇ることがある。それは、例のチエコ事件を翌朝の新聞が報じたのだが、同宿のドイツ人達が、面白そうに話題にしていたのは対照的に、中立国オーストリアの国民であるホテルの主人夫婦の沈痛な表情が忘れられない。柔軟なオーストリア人の顔は、このときはなんとなく頼り無気にみえた。逃亡者を追うソ連軍の戦車の地響きが、彼等の耳にだけは、重々しく無氣味に聞こえていたに違いない。確かにこのチロールの地でさえ、プラハから僅か四〇〇キロしか離れていないのであつた。

中川孫一氏五年祭

増山清太郎

十二月十二日、孫さんの五年祭が如水会館で行われ、望月、岩崎、久保、山田、甘利と私が出席した。折しも日曜日で、当日もまた日曜だったことが想い起された。

て、二三の出席者が故人を語った。
事件から五年も経つたし、子孫は繁栄しておられるので、温っぽい感じは無く、故人の志向を忖度してバッカスが多量に用意されたこともあって、和かな雰囲気の中、午後の一時が過ぎていった。

なお浩一氏が報告した孫さん子女の現況は、まず浩一氏は担当が教育史なので、講議のかたわら、明治の教育制度確立に尽力された祖父の事蹟を、中川家に残る資料をもとに、まとめておられる。長女花沢怜子さんの夫君は材木商、次男靖夫氏は埼玉大教授、三男三郎氏は巴川製紙に勤務するエンジニアである。

ザ七八一七。

静子夫人の住所は、大宮市飯田、大宮プラ

環境を考えて、次男靖夫氏の家の隣に隠居所

を新築して住んでおられる。お見受けしたと

ころ大変元氣で、当時に比べて年老いたというような様子は、全くない。

ついで一橋同期の桜井芳一氏が立って、大正九年に初めて顔を合せて以来の、マゴチャン一と氏は呼ぶ一のいろいろの心遣いを中心にして、故人を偲んだ。続いて望月君を初めとし



孫さん追悼山行

久保孝一郎

乗鞍番所山荘

会報前号予告の通り三月五・六日、標記山行を行ないました。五月午後、湯本平ザワソ沢入口（旧山北農校の下）にて、献花默祷、

今回は孫さんゆかりの中川温泉信玄館に泊る。参加者は、松木、増山、鈴木英雄、宮城、久保。

早朝より畔ヶ丸に向つた佐藤政雄が、夕食前に合流、改めて黙祷の乾杯（？）をする。

翌六日早朝、鈴木、宮城、佐藤、久保がタクシーにて白石沢キャンプ場まで入り、峠へ向い歩き始める。快晴なだけに寒気は厳しい。鈴木さん不調の為、加入道避難小屋に待つてもらい、三人で大室山登頂。帰りを急ぐ佐藤君は山頂より直接道志側へ下り、他の二人は往路を戻り、鈴木さんと共に白石峠直前地点より道志側へ下った。この時期の西丹沢は人気少なく、雪の尾根路を散歩するのはまこ

とに楽しい。来年もまたこの季節に、今度は神ノ川小舎に泊って、歩き廻りたいと思う。

編集後記

会報第四九号をお届けします。



七七年の第一号という訳で、当初は例

年通り七六年の山行表を掲載する予定でしたが、頁数（予算）等の関係から今回は掲載を見合せることにしました。わざわざ山行表をお送り頂いた諸先輩には申し訳ありませんが、スペースを取らない方法で、できれば次号で、と考えています。



次号で復刊第五〇号となります。ひとつの区切りとして、会員全員の消息がわかる様な内容のものにしたいと考えております。頑張ってやるつもりですので、御協力宜しくお願ひします。

一九七七・三・三一

藤本敏行

1

針葉樹会報 復刊第49号

発行日 1977年3月

発行人 針葉樹会 会長 望月達夫

編集人 藤本敏行

印刷所 大栄印刷
